

【海外留学レポート】

## 留学の本質

### ノブレス・オブリージュ

#### The Nature of Studying Abroad: Noblesse Oblige

ボストン大学4年 小林 聖弥

KOBAYASHI Seiya

(Undergraduate Senior, Boston University)

---

キーワード：ボストン、学部留学

#### はじめに

日本国外で長期間生活をしたことのある日本人と、したことのない日本人とでは、意識の上で大きな違いがあるように思われる。海外で暮らすということは、それまでの自分個人の中で確立されていた価値観のようなもの、あるいは倫理観のようなものが破壊され、自分を含めたあらゆるものの存在や実体が、相対的な関係性に基づいて再構築されるということである。端的に言えば、それは人生において、世界を視る目を本質的にアップデートできる絶好のチャンスであり、留学とは、学生のうちに海外でそういった経験値を積む唯一といっても良い大変貴重な機会である。このレポートでは、自身が米国の大学で留学をする中で考えたこと、折に触れて感じたことをいくつかピックアップして紹介する。

#### 大学に通う意義

「なぜ大学に通うのか」という問いは、四年間の大学生活を送る上で幾度となく直面することとなる疑問であろう。特に米国の大学に通うためには、多額の授業料や生活費が嵩むこととなるため、学生生活を送っていく中で否が応でも大学教育の費用対効果や、わざわざ海を越えて海外で学ぶことの意義について考えさせられることになる。無論、社会的信用が上がる、専門知識を学ぶことができるといったことは確かであるが、果たしてそれが大学の本質的な価値であると言われると、必ずしもそうとはいえない。大学を出ずとも社会的に成功している人は数え切れない程おり、専門知識についても昨今はEdTechと呼ばれるように、オンラインで専門知識を習得することも比較的容易である。つ

まり、大学の本質、留学の本質はこれ以外のところにあるべきなのだと考える。

「人生を変えるための三大要素は、時間の使い方・友達・住む場所であるからそれらを大事にしてください」と助言を受けたことがある。まさにその通りであると思う。教育を施す教授陣と、教育を享受する学生が一つの場所に集まって議論を交わすことにこそ大きな価値があるのではないか。またそこに集まる人々も皆が皆同じようなバックグラウンドであったり、思想が似通っているようではあまり活発な対話は生まれてこない。考え方が違ってこそ、例えば自らの頭の中で考えていることを外に効果的に伝えることの難しさを認識することができ、そのような対話の繰り返しが結果的に他者の理解、世界や社会の理解に繋がるのである。俗に言う多様性とは、そういった意味では自己の内面を映す鏡のようなものであり、留学における多様性は他者理解と共に自己理解をも促す潤滑剤のような役割を果たしているように思われる。

一方で、多様性とは何人も人種や思想に拠るものだけではない。大学とは、「学びの多様性」を模索することの出来る絶好の環境・タイミングであると感じる。大学においては、何か学びたいものがあつたときに、「それをどうやって学ぶか」と学び方の選択肢の数を増やししながら、自分に合った学び方を見つけるための時間が十分に確保されているのである。必ずしも大学で学びたいことが全て学べるわけではないが、少なくとも本や論文を読む、人に訊く、人に教える、といったインプットとアウトプットの方法については色々試すことができる。その試行錯誤を通じて自分なりの学び方が見つければ、大学卒業後もどこにしようが、常にベストな方法で学び続けることが出来るようになる。常に自ら問いや仮説を立て、それを学びによって解決・検証していくサイクルを習慣化することこそ、大学卒業までに身につけておくべきことなのではないか。

## 留学の効用

三島由紀夫の小説「潮騒」にこんな一節がある。

“未知を遠くに見ていたあいだ、彼の心には平和があつたが、一度未知に乗組んで出帆すると、不安と絶望と混乱と悲嘆とが、相携えて押し寄せて来たのである。”

これは主人公の新治が、彼が恋心を抱く初江という女性と密かに(初江の家族にバレないように)会おうとする際の心理描写であるが、個人的には、これと全く同じことが留学に関しても言えると考えられる。留学に行きたいと憧れを持つ段階では、留学というものはどこか遠い夢のような偶像であり、いざ実際に留学の準備を始めると如何にそれまでの自分が薄志弱行であつたかを知る。また準備を終え、実際に現地へ行く前と、着いてからの心理状況の変化もこれと大体同じようなものである。留学とは、そのような心理的、実際の試練の連続であり、それを乗り越えるだけの気力と体力が必要なのだ。

僕が高校生のときに留学を決意したのは、ふとした瞬間に「自分はアメリカに行かなければならない」と直感的に感じた、ただそれだけの理由である。その他の現実的で論理的な理由は全て後付けで

しかなく、その瞬間の自分の直感のみをただただ真摯に受け止めた。留学に行く前から、例えば就職のことを心配する人の気持ちも何となく理解はできるが、それでは留学の効用は何であるのか。単純に世間的な見栄えがいいからという理由で、僕は学部留学という道を選んだのではない。言うまでもなく、就職のことなど留学前には頭によぎってすらいない。振り返ってみれば、それは完全に内的な、独立不羈とした何か強い心の作用によって決定されたものであって、外的な要因にはほとんど作用されていなかったように思われる。

留学から何を得るかは、最終的には自分の意思と目的意識の強さ次第だ。ここで目的ではなく、目的意識という言葉を用いたのは、留学前後で将来の方向性や目標とするところは存分に変わりうるからである。あるいはもし仮に人生の目的が学生のうちに具体的に決まったところで、その目的から逆算してその後の人生を送るとなると、どうも完璧に計算された道を辿るような気がして、味気なさを感じてしまう。つまり、具体性のある長期的な目標は学生のうちには決まらない(決めない)と仮定すると、意識の変化を自然なものとして受け止めるだけの柔軟性と、どんな状況に追い込まれても自分を信じ続けることのできる精神力が、留学の効用を自分にとって最大化するために必要な2つの事柄であるように思われる。一定の解がないからこそ、留学は楽しいのであって、将来のためのツールといったプラクティカルな視点で留学を狭義に捉えてしまうのは勿体ない。

## ボストンの歩き方

アメリカに留学することを視野に入れているのであれば、自信を持ってボストンをお勧めする。ボストンはこじんまりとした街である。章タイトルを「ボストンの歩き方」としたように、頑張れば歩いて回ってしまう規模感で、ボストン大学は街の中心部からやや西に外れたところに位置し、近郊にはタフツ大学やボストンカレッジが、隣町のケンブリッジにはハーバード大学やMITが連立している。ボストン市とケンブリッジ市の間にはチャールズ川と呼ばれる大きな川が流れており、夕暮れ時には各大学のレガッタのボートを浮かべながら、夕日を反射して燦然と輝いている。また、GoogleやFacebookをはじめとした多くのIT企業がオフィスを構えており、学生街でありながらオフィス街でもある不思議な街である。

ボストンに留学する最大の利点は、数多くの大学が集結している点である。東京でもなかなかボストンほど大学が密接に集まった街はないのではないだろうか。大学が集まっているということは、一つの大学を超えた繋がりができるということであり、また大学間の共同研究なども盛んに行われている。しかも、ボストンはただ単に大学が集まっている街なのではなく、歴史的にも古くから高等教育機関が集まっている伝統的な大学都市なのである。街中を占める赤レンガ作りの古めかしい建物も、そのような時の重みを含み、アカデミックな雰囲気をとところどころで醸し出しているようにも感じる。ボストンの洗練された空気が、学業や仕事に打ち込む活力をそこに住む人々にあるいは与えてくれて

いるのかもしれない。

ニューヨークほどではないが、ここ最近ではボストンにも日本料理店が増え、牛角や山頭火(ラーメン)も複数店舗存在する。また、沿岸部に位置しているためシーフードが美味しく、牡蠣などは作家の村上春樹(一時期ケンブリッジで執筆活動を行っていた)もマラソン後に好んで食べていたとも言われている。冬はチャールズ川が凍るほどの文字通り凍てつくような寒さだが、冬が明ければボストンマラソンがあり、ボストンコモンには色とりどりの花が咲き乱れ、レッドソックスの試合でボストン市民は盛り上がりを見せる。このような一つ一つのイベントも、ボストンにいるのだという感覚を絶えず与えてくれると共に、学問とはまた違った刺激を与えてくれる。僕にとって、ボストンは理想的な学生生活を送るための別天地であったというより他ない。

### アメリカのリベラルアーツ教育

過去の個人的な体験として、フランス語を勉強したことによって英語力と国語力が相乗効果的に上昇したということがあった。一見すると、フランス語を勉強することはその他の能力を上げることとは無関係(むしろその分だけ時間が取られるため逆効果)なようにも感じるが、実際は各言語を相対的な関係性で捉えることによって言語力全体が底上げされる結果となっていたのだろう。これとアメリカのリベラルアーツ教育は非常によく似ている。幅広い分野を浅く学ぶことは、学問の全体的な構造を理解し、これからどの分野を学んでいけばいいかを考える(悩む)きっかけを学生に与えてくれるのである。僕は数ある学術分野の中から、元から興味があったコンピューターサイエンスを専攻に、これから需要が高まっていく傾向にありそうな哲学を副専攻に選んだ。

しかし、何を専攻にするかは、大学(特に学部教育)においてはあまり本質的なことではない。「大学の意義」の章でも書いたように、大学に通う意義とは学び方の多様性を身につけることだからである。言い方を変えれば、スティーブ・ジョブズの「点と点がどこかで繋がる話」の点の数を増やすことが、大学において最も重要なことであり、リベラルアーツ教育は、まさにその点をより多く見つけるための便利なフレームワークを学生に提供しているのである。一方で、日本の大学ではまだまだ入学時に学部と専攻を仔細に決めなければならないところがほとんどであり、興味もない分野を四年間学び続けることになったり、入試難易度が高いというだけで医学部に入学したりする学生も少なくない。しかし、果たしてそれが大学教育のあるべき姿なのであろうか。個人的には、学部・学科と事細かに分けてその狭い領域の中で学生を泳がせるよりも、はじめから多数の選択肢を与えて学生に自由という名の悩みを与えることの方が、教育的意義があるように感じる。

だからといって、誰しものがアメリカに行けばいいというわけではない。各々にはそれぞれの性格があり、学びのスタイルがある。例えばはじめから物理を極めたいという信念を持っている人も少なからずおり、一概にリベラルアーツ教育が最善であると結論づけることは到底できない。リベラルアーツ

ツ教育は便利ではあるが、万能ではないのだ。しかし、少なくとも生来横紙破りな性格である僕にとっては、思う存分悩ませてくれ、考えるきっかけとなるリソースを与えてくれるアメリカの大学のスタイルは性に合っていた。それがあるいは「留学の効用」の章で述べた当初の直感に繋がっていたのかもしれない。多様性やロケーションだけでなく、教育システムも、僕にとってはプラスであった。

## 最後に

「ノブレス・オブリージュ」というフランス語がある。高い教養や社会的地位の獲得・保持には、それ相応の義務が伴うという意味の言葉である。また、古代ギリシャの哲学者であるアリストテレスはこう述べた。「人間は社会的な生き物であり、その点において他の生物と一線を画している。」思うに、我々は生まれながらにして社会と繋がれ、あるときにはその恩恵を享受し、あるときにはその代償を払い、そのようにして極めて自然な形で自他を相互に助け合うように生きている。僕個人としては、米国の大学で学ぶという経験、またそこから得た学びの経験を、今後必ず何らかの形に変換して社会に還元していきたいと思っている。そして同じような意識を持つ人が少しずつ増えていけば、大学教育の改善だけでなく、結果的により幸福度の高い社会が形成されていくと願ってやまない。そのような願いも込めて、今回このレポートを執筆させて頂いた。